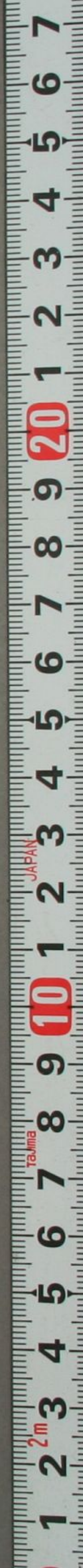




枯尾華 下

伊地知文庫
文庫20
342
2



十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱



いつのそ風のしるもよも高のそ
おてみしちる春よわたり木よ
笠み眠り小菫の病つるのほ世をふみ
あけや枯せもあそみさのふ
るをそららのうつまをそ其角ハ
ける契あつや生おのふちあなる

遠くおちつゝ魚の遠く境の
いもいもなるや江都の
乃ちさるゝ遠くこゝろへ
もて追善具ののこる
ひらひらひらひら
て出ぬゝいぢみ
うけと暮月七日の
義仲の辰上へ
ひさすゝく立華

水月とてほろり心鏡
ひらひらと象のけし
乃ちあるゝゝゝ利
終々其非不竭
あゝゝ

そりすゝくおちつゝ
いもいもなるや

嵐雪耕

十月廿二日夜無行

嵐雪

十月廿二日夜無行とげりしるる

あつたのちよ一節の長少を
溢のち二三の五五とくまき 百里
まねと見ゆる沖の船以 神叔
のぬりつふ白ふ山名 祐 東潮
ま騁さるひと豆あひし 浮生
蜀黍の室まをさるくし 畑中 ト宅
あゑあつたよふて土をある 舟竹

新川まきい名あつた女校のく 桐雨
あつたあつたて照くくくく 月下
あつたあつたあつた田植を 風洗
あつたあつたあつた千般^{正七} 撤下
あつたあつたあつたあつた 咸宇
あつたあつたあつたあつた 牧人
あつたあつたあつたあつた あつた
あつたあつたあつたあつた 銀鉤
あつたあつたあつたあつた 東潮

山吹もくく都をくすれま 為る 毒
あまのふのやなまきくくく はる
氣おめくろふ時ハあはる 百里
只あまの四十の内ノ樂坊主 氷花
あまのくくくくく はる 嵐雪
くくくくく はる 神叔
佐解のふ乃出就静 はる
ま実のまま切打く はる 百里
城の近くは旅く はる 神叔

傘のわくくくく はる 嵐雪
あまのくくく はる 氷花
あまのくくく はる 東殿
先度のくくく はる 百里
あまのくくく はる 氷花
中山道ハかか はる 嵐雪
一歩を本の價のく はる 百里
さあ代もあくと はる 氷花
あまのくくく はる 氷花

せ常の後のりらむと成緑子

満座追善各焼香

なまの人の御ちも四季の御所 百里
元おさめの御所いつはちり比 氷花

悔前非

もなつちる御 さいさきを御 神叔
若しおののまもあま塚の雪 淳生
風のふと 何そや墓乃月 舟竹

君のうれ御のまの御のたし 咸亨
はや二たとならむ月ある 寺
うのまやちをうまある 潮既 寺
ちのちのちをふまある 咄し 素子

芭蕉の御のちをうまある 寺
ささきをうまある 寺
水はのちをうまある 寺
あはる芭蕉のちをうまある 寺

十月廿二日毎り

好くも多く讀よとつと逆旅

るにあらんやうきかひひをて

付やあひいをもまのめとおとす枕隣

流くゆりよを此目の紅子珊

一面より起る小松ゆやと杉風

よごれーるを川をあらけん水

名由いふ能ふくくるく良

どこやう暇ふれぬの帷子序志

?

皂莢又梅をあらる賜の春太火

細ふり入ル古桶の底亀水

心のよ今の住をを惜みて孤を

とまうらう景の塩原子祐

大寒さあられ雪のある曇利牛

あ綿の重くもよのせえ白之

脊へ傳ふあふさくもか蚊足

お通るれと堀のうう夢を

やあくく平泉さうもる月時坡

大幡さそふ布の尾綿 太洛
ま白な陰ハ流る岸の色 八葉
俵のくち魚子 燕あまふ 桃川
とろくやあまはもせしもの 元 初合
昼みはらりて昔のこい登根 磯く
酒乃を干なりく 一より 笠岳川 文梁
ゆきおといて 砥鉾をむれ 湖松
つちるく ちやうかふ ちやうかふ 相美
家のあまふと 小利な住ム 嵐夜

丁寧に又桃灯て 送らる 石菊
凡そ雪の柳地あつく ちり
梅のこゝ 苦難とるり かにすり 嵐竹
白のこゝ 梓のせり かにすり 此筋
あまふと けしあ 経奢る 月の君 素龍
比脚く くりり くりり 新風 手川
よいくと 紫けりり 多ふ 菊の君 楚舟
流る くりり 雨あくる 角蕉
あまふと くりり 多ふ 菊の君 杏村

紫く白紫のわのうなる年 川嶋
見開くもあつうなる花微笑 濁子
香をむすんで 乾うけとら 滄波

吾仙満堂普音之吟

うゝむつお 保もや や勢を身 杉風
枯きやあも力もあふあり 八葉
見ねるや 杉野よりあの花はほ 子珊

見るやうに 既中きうけん 房の松 太土
所よりあぬ 歌あやあのおもより 歌 湖松
菊うけく 白を惜む 居士衣 子祐
山菜もあや 蝶の舞う 極もやん 左路
うた 便あ 結うて 義もや 序志
葉のむも 白ひも 向んうて 心 電水
見送りも 多うあやうなる 歌の義 李里
骨肉のうて ゆるりあう 心 楚舟
あけく 夢をさる 房のちあふ 外 尾弦

悲しきを包みしものもあはれ 枕川
さだ花衣よもあはれんを牡丹 母と
さうねりや火能くも苔の下 馬好
ゆきを思ふよしののけ向が 用陽
うみは雲集りうの植柳 杏村
その散ちくやいふれあはれ 石人
むちりも昔の枯葉の燃えさる 芳良
あはれも縄床よりあはれ 滄波
神はあはれを思ふよしの 角蕉

義仲さく道々情

法眼

水さくん足もあはれさて 厚川 季吟
告ぐさく死をぬりしあはれ 山 露沾
花あはれさくといふ春もあはれ 山夕
錫杖さくあはれさくあはれ 直方
泣くくも目のあはれさくあはれ 昭風
あはれさく接はれさく 塚のあ 濁子
あはれさくあはれさくあはれ 壺蛙
あはれさく白い卒都婆さく 山蓬

舟にけしものや十余のりて 涼葉
小庭や中々を遊ばるる 凍 大舟
いづの海や十段のたひりき 九板
塘をみるや社のまの初歩 此筋
立ちけし心うける塚のま 千川
力州引切るるにふあゝる 淵泉
ちかきれりるん笠のま所 支老
植葛のまやある笠の糸 ト子
寒菊乃咲はるる 名あふ 接糸

あしき菊ハハロよりいそある 其丹
こや形凡菟の種蓋五指の松 茂勅
何のつのはりのゆや植る 蓬山
五十二のゆち一のまのま ちり
既既流るるも社のまのま 塵谷
その塚をさるる枯樹のまのま 穀子
心ゆきと頬を凍つく涙のま 馬寛
風の声なり拾ふもまのま 素就

湖春

五子龍

嘉祐

萍水

批陸

炭水

時坡

孤臣

利牛

杉風

素堂

筆

利合

种坡

水

郝侯

杉風

酒をいそぐてかゝる
 けつをいそぐてかゝる
 立くつていそぐてかゝる
 如あひまゝいそぐてかゝる
 子えの勢のゝゝゝ
 毛この勢のゝゝゝ
 高きをいそぐてかゝる
 物中のいそぐてかゝる
 財布をいそぐてかゝる

の一餅つとくもさる 配り餅 岱水
 とわらわれと 雁やうめなる 枕隣
 山くを信使の者み 杉風
 本の多うよ 兼 美月 枕坂
 高の本の並ひ 杉涼し 孤空
 小わけをうけてゆく 利牛
 ニく 伊勢上るり乃 物々 枕坂
 意々のれ 蘇 枕坂
 袖 今師の好く 枕隣
 枕隣

そと優美あるもの夕昏 利合

十月廿二日

晉子亭ありて無事

今も雪のそそぐ光る

仙化

いつそあふ森と並み鴨

是吉

あつ月黒ふ衣衣ハ純て

介我

拭ひのこる 階乃く方 柴栗

了の柏イフキ櫓にまゐる二や足 湖月

昼の風の穴をけりあふ 津牧

あ向も世の隅の目をけり 揚水

力もあひく 証 志あふる 秋風

此くをゆく 召く 町あふ内 由之

雀の枝も 鳴る乃あふる 全峯

日あふる 玉本の屑ハ泥の行 作徳

さふくもろく 柳平の如 孝下

合羽あふるく 歌く 白墨 津牧

小僧よりありていさみつゝ
扇うほ磯くしむれ月の香
側のところろ白ひをよき
あのをちほきと舟あそび
ちいさな松のうしむ例の
あ貝の阜もあつてものこ
日光梳子似あふ芳飯
かこするを忘れ年のは
あ糸のあくハ糸や判り

揚あ
柴車
仙化
揚あ
春下
四月
柴雲
介我
非救

ああとえすえ茶入袋
あふ躑^{キヒス}やあうその緒
墓のごとくをまてて惜
るを土戸あそむ口元
うしろの所くをけり
生^キくらあそむと悪の入物
年の月の鳥帽子の乳の直^ラ
二しりああそむと虫あ
色もあそむ乳の黒の小糸喰^ム

秋風
四月
介我
泊徳
仙化
揚あ
春下
全拳
非救

つみそて猶子まゝりゆ 米由之
肩癖のあまねをよけしりんを仙化
けしりあゝま牛除るを介我
常のえむ連気拍むの花を介我
垣ちぬ桃をくんの教を湖月

深草のあまね宗我を讃して
いそすや友風月家旅泊や
芭蕉のあまねをいそす
旅の旅つみそ宗我のあまね素堂

あまねく人あまねのあまね
煙火のあまねくあまねを新あまね 松風
風子のあまねくあまねを猿乃面介我
月あまねのあまねくあまねのあまね 月
鶴あまねのあまねくあまねのあまね 湖月
風のあまねくあまねのあまね 柴雲
あまねのあまねくあまねのあまね 暮子
かまねのあまねくあまねのあまね 拙
帰るあまねくあまねのあまね 岡指

力州よりいふなり 乾花 山峰
 果をまゐるふみふきなり 芭蕉 寒玉
 十法の神ありふきこの中なる女 新色
 まゐるふみふきなり 和永
 句の神やけし目の世のやて 芝庭
 さうんくいや 難波く向て 一雀
 神のまゐるふみふきなり 是吉
 ありふきふきむちぐ 林也
 雪のまゐるふみふきなり 李下

窓のまゐるふみふきなり 亀翁
 青石の陰もありふきなり 横儿
 後乃 野子 撫ありふきなり 景桃
 ふみふきふきふきなり 萍水
 ちのふきふきふきなり 野城
 赤乃 陰を掛くふきなり 孤屋
 油火の溜く悔むやふきなり 利牛
 すうふきふきふきなり 疎雨

名月み松糸の一種おもひ付^ケ尺艸
お^ラくあほは^シ廣ふ相の糸 松翁
白粉の積より^シる花の^シ氣 去来
火燐^ノく^ノの^シる^シ中^ノ 正秀
名存^ノ越^ノの山^ノあ^ノの^シる^シ曲^ノ聖
榎^ノの^シる^シれ^シ海^ノを^シた^シる^シ心^ノ筆
吹^ノく^シん^ノ屏^ノけ^ノを^シ膝^ノ子^ノ押^ノ進^ノ 徹士
鼓^ノく^シ色^ノし^シ大^ノか^ノり^ノを^シる^シ心^ノ圭
の^シる^シや^ノう^ノと^ノ孟^ノみ^ノあ^ノる^シ序^ノ 暮四

あ^ノち^ノす^ノも^ノて^ノ母^ノや^ノい^ノん 巨海
情^ノ甦^ノの衣^ノ蛸^ノつ^ノく^ノろ^ノや^ノり 荷今
湯^ノあ^ノり^ノ乃^ノ力^ノれ^ノ冷^ノる^シ心^ノ成^ノ童
弓^ノも^ノう^ノの^シい^ノる^シを^シる^シ竅^ノ心^ノ風國
山^ノあ^ノの^シみ^ノ帶^ノ氣^ノ都^ノあ^ノる^シ集加
獅^ノ子^ノの^シ度^ノく^シる^シ心^ノや^ノ花^ノの^シ陰^ノ 晉子
杖^ノく^シり^ノあ^ノる^シ我^ノ老^ノ乃^ノち^ノ重勝
う^ノら^ノぬ^ノ和^ノ尔^ノや^ノ里^ノ田^ノの^シ庫^ノ傳^ノ心^ノ 進を
塩^ノ辛^ノ桶^ノく^シあ^ノる^シ新^ノハリ 徹士

あつらふを都ふんあり 枕隣
あつらふやめあふ人（家） 岩翁
よふらふもあつらふ柱杖（新） 横儿
こゝやとてあつらふ鶏足 巨海
牛あつらふし（こ）ろ 女あつらふ 尺中
あつらふて碑のふもあつらふ 月形 進受
あつらふてあつらふあつらふあつらふ 撒士
あつらふあつらふあつらふあつらふ 花分
肥肉あつらふあつらふあつらふあつらふ 集加

梵天寒くくくく 川中を 書四
灯も困るあつらふ光るん 荒る
不思議な娘をあつらふあつらふ 去来
白粥のさつらふあつらふ 思ひ院 岩翁
あつらふあつらふあつらふあつらふ 短尺 子
こつらふあつらふあつらふあつらふ 時童
あつらふあつらふあつらふあつらふ 瀬士
あつらふあつらふあつらふあつらふ 曹凡あ
あつらふあつらふあつらふあつらふ 集加

ナ
米^ナに^ナも^ナあ^ナり^ナて^ナあ^ナる^ナ 艸舟 集加
地^ナを^ナ建^ナて^ナあ^ナる^ナの^ナ 浮橋 晉子
筆^ナの^ナ 制^ナれ^ナて^ナあ^ナる^ナの^ナ 拵 岩翁
あ^ナる^ナと^ナ運^ナす^ナあ^ナる^ナの^ナ 木枕 徹士
天井^ナを^ナけ^ナて^ナあ^ナる^ナの^ナ 窓 尺中
う^ナれ^ナ刈^ナ込^ナの^ナ 里^ナの^ナ 高^ナ物 荷兮
お^ナの^ナ ち^ナの^ナ ぼ^ナく^ナく^ナ ち^ナハ^ナ下^ナリ 横儿
き^ナん^ナと^ナい^ナあ^ナる^ナの^ナ 腹^ナ掛 心圭
後^ナの^ナ 所^ナつ^ナて^ナあ^ナる^ナの^ナ 月 雪

き^ナん^ナの^ナ 着^ナと^ナ母^ナの^ナ セ^ナと^ナく^ナ 舟童
き^ナん^ナの^ナ 痛^ナハ^ナ付^ナ属^ナの^ナ 枕^ナ あり^ナ 岩翁
は^ナあ^ナる^ナの^ナ 舟^ナを^ナ 舟^ナの^ナ 舟^ナ 風^ナ ぬ^ナ
あ^ナる^ナの^ナ 赤^ナ飯^ナく^ナる^ナの^ナ 大^ナ井^ナ 辰 集加
お^ナる^ナの^ナ あ^ナる^ナの^ナ 百^ナ姓^ナの^ナ 子^ナ 晉子
日^ナの^ナ 心^ナは^ナあ^ナる^ナの^ナ 程^ナ 棲^ナち^ナ 徹士
は^ナ脚^ナの^ナ 笠^ナを^ナ 笠^ナと^ナく^ナ 尺^ナ 中^ナ
は^ナり^ナの^ナ あ^ナる^ナの^ナ 心^ナを^ナ あ^ナる^ナの^ナ 心^ナ 圭
新^ナ大^ナ橋^ナの^ナ あ^ナる^ナの^ナ 心^ナ 圭

赤つゝや切干下は尾張者
 ちゝろゝ多し御の身カタクキ質
 外走る琴を悲む花のお
 料草一よ佐の文り
 荷今
 重勝
 桃隈
 横儿

此一帖者就落抄舍書校合變

寺町二条

井了
重勝判

追如

於義仲寺六七月

惟

花多にエウされ
 某乃紙此をぬに
 偶くは火折のや
 明日カミてと
 月新に綿抱へら
 柄少く
 冒
 正
 臥
 探
 芝

かゝらにつきく様ふ印のき 酔刀
草拵りもとをりしと居るく 文州
片巻乃觸にそのむ代判 純筆
角縁を今にわぬ家中凡 胡板
なまり細よあ乃 名 物 直人
とやまゝひつゝと梅もあゝと 尼 智月
をぬる細く乃瘦くなく 惟純
あふ佛もてかゝり、秋乃孫 正秀
あゝ尚ゝゝ鹿児もれ月 臥る

新書に陰の奥にぬる草巻あけく 昌唐
茶と塩わゝゝゝゝゝ 才 深刀
とろりと花よ夕日の入とぬゝ 丈艸
片一の様よむあゝゝゝ 胡板
紙おゝ隣つれまゝ乃 風 直人
芝居を鼓乃拍子あゝゝゝ 貞光
ひつゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 櫛 芝
地えあゝゝゝゝゝゝゝ 微唐
嘴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 川 支

有るの髪ふくとけく家文州
 照月と海老名乃海まゐる也乙列
 秋れ小年になく濃く曲翠
 くれゝる陽子の下乃まゐるは臥る
 砂舟の緒を双たれ人穂葉
 お合の終を極める道ま行北ま
 茶籠まゐるゝる乃年の花園河
 まぐぬ陰ふのとれ中ひ胡故
 きのつえりまゝと味縁まひ怪柳

いま乃やうゝた多き門庭まゝ 這華
 今一ちまうらまはなくなる朴吹
 こつちゝまゝ仕旦一それの曲翠
 むゝゝあゝゝ芝乃けろみ昌房

この仙満座訃音と吟

一葉大徳

肩うらゝゝ手うらゝゝ泣き川小作人
 此海や柳乃花やゝゝと乃花刑也

於家仲寺真行

墓をく運乃て持ッ氷う氷ね桃もも類

あゝあゝわくろ
そ乃果のそ
智月

正秀

世目之

皇都

諸仙堂

藏板

書林

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

極行

浦井德右衛門

古今茶人花押藪

冊一

同
續ぞく
篇へん

一冊

古今今に至るまで茶事なれどさうする名高き人れ花押をうつ免
ふべく傳を附して考古の便とて
前篇小波さへ入より近世の名に達するまでさうさう真跡を摸
稱号小傳を詳ふさう茶家者添必覧の旨とす

古今茶人系譜

一帖

增修茶人系譜

一帖

珠光。義政公以来諸派のつゞき、（一）系圖（二）ふあふ。且花押を附（三）し、鑑定家の重宝と云ふ。

茶湯早指南

一 小
冊 本

同二篇

一冊

同三篇

一冊

貞の妻しん、器もく扱くわつ。唐物たうぶつの次第しだい。廣坐鋪ひろざう。庭作てんさく。石いしのこゝにある。

茶事談 一冊

諸家の系圖并傳稱号平去の年月とくく記を名物
諸品の米由此道の心得ふなき茶法と出次

築山庭造傳

全部三冊

築山庭作傳 一冊

山水作やう。并法式石の居す。樹木植方。名勝真景の写し
す。泉水并滝の仕うけ。水吐し。魚の養杉。苔植。州木育す。
石燈籠。手水鉢のり。其外庭作の秘傳心得と詳記。次諸方
名高き林泉と摹し考作の便。又庭造全備の旨あり
真州行三體庭造方より。こゝに法面白き景と見え自然の
作意を以て造る。法式数々。圖画ふり。雅居に傳ふ

花壇綱目

全部三冊

樹木。草花の育す。実り。接木の法。花壇倍養秘傳。地ふり。之
肥の仕。其外傳秘る。悉く記。玩樹家必覽の旨あり

浪華書林

心齋橋通唐物町

河内屋太助梓

和漢御書物古本賣買所

唐本和木石刻法帖神儒佛書天文地理
理歷史曆纂歌書記録繪入讀本貸本
寫本軍談雜書類百人一首御經品々
右々外何れも浪澤山仕入。未だ間多。少くも浪
御用向。何れも亦亦用。御用。御用。御用。
括別相御。買法。古本。交易。付。付。

書肆

心齋橋通唐物町

河内屋太助

